

鳥獣害便り

やまだのかかし

地域の鳥獣害をサポートするサイトです

編集・発行者：山村 準
Tel:0595-63-1725
Email: jyun.y@asint.jp



獣害の歴史

旧石器時代〜現代まで、人々は野生動物とどのように関わってきたかを年代を追って、検証してゆきたいと思えます。

日本における農業の始まりは、かつては弥生時代からだというのが通説でありましたが、縄文時代、既に農業が営まれていたことが明らかにされています。野生獣と人間の攻防の歴史を振り返ると、石器時代ではナウマンゾウやオオツノシカなど大型獣と食うか食われるかの世界で生きてきたのです。しかし、ナウマンゾウなどの大型動物は旧石器時代（約3万年前）に絶滅。縄文時代はシカやイノ

シシ、ウサギなど中・小型動物が狩猟の対象となり、狩猟方法も新しい技術が取り入れられてゆきます。

石器時代
旧石器時代
打製石器（石を打ち欠いてつくった石器）が使われていた時代。

新石器時代
磨製石器（石を磨いてつくった石器）が使われていた時代。このように旧石器時代と新石器時代は、使われていた石器により区分されています。

日本列島では約3万8000年前に、私たちの祖先が大陸から日本列島に渡来してきたと考えられています。その渡来ルートには諸説あり、朝鮮半島か

ら対馬を経て北部九州へ至るルート、台湾、琉球列島を島伝いに北上するルート、大陸の北側からサハリンを通って北海道へと南下するルートの3つが考えられています。

石器時代の日本列島は、「最終氷期」と呼ばれていて現代よりもはるかに寒冷な環境だったのです。石器時代の人々は、最も寒かった「最終氷期時代」を狩猟採集を生活の糧として生き抜いてきた民族なのです。

当時、大陸の多くは厚い氷や雪におおわれて、海面が今よりも100メートル以上も低く、日本列島と大陸は陸続きで、ナウマンゾウやオ

現代に至り、その化石が、日本列島の至る所で発見されています。氷河期の大型動物として代表的なマンモスの化石も北海道で発見されています。

遺跡から出土する石器類は、狩猟具や動物の解体・加工に使う石器類が多いことから、ナウマンゾウやオオツノシカなどの獣肉は貴重な食料だったと思われる。

弓矢の発明
ナウマンゾウやオオツノシカより遙かに小さい人間が、食う立場の捕食者として君臨してきたのも精度の高い狩猟道具を考案し使うことが出来たからです。

石器時代弓矢は使われていた



多賀歴史研究所hpより

弓矢は人間の戦闘用武器へと用途を変えていきます。

大形動物に比べ、行動範囲が狭い中形から小形の動物は、最近の研究では日本列島内で独自に進化したものが多いと考えられています。これらの動物は、石器時代の人々にとって、なくてはならない食料だったのです。

石器時代の、狩猟・採集を基本とする生活は縄文時代後期まで続いています。

縄文時代後期、九州北部で始まった稲作は、各地に広がって定着してゆきます。弥生時代中頃には、東北地方の北部まで稲作が広がっていたと考えられています。これが日本農業の始まりです。

当時の稲の栽培は、水田に野生の稲の種子を直接まいて育てる、今という湛水直播栽培だったと思われる。

定住生活

縄文時代では、狩猟採集活動から食糧を生産する時代へと転換をし、1カ所で継続的に食糧を調達できるようになり、人々は一定の土地に集落をつくり定住生活をするようになります。これが日本という国家の始まりでもあります。

定住生活は、縄文時代草創期と呼ばれる約13,000年前から約10,000年前の間に始まったと考えられています。

縄文時代草創期は、氷期から温暖な気候へと変わりつつある時代で、大気の変化によって暖かくなり雨が多くなった大地では、落葉広葉樹（冬季、乾季に落葉する広葉樹）の森が生まれ木の実を食らるようになります。かつて草原だった土地は浅い海になり、魚や貝などの姿が目立ち始め、わずかながら漁労も行っています。

氷河期にいた大型の動物にかわって、サルやシカ・イノシシなどが姿を見せるようになりますが、長期の狩猟生活でいずれの個体数も大幅に減少。縄文人は狩猟を保護に切り替えるなど、減少したシカ・イノシシの増殖を図り個体数を回復させるなど、シカ・イノシシを適正に管理し、一種の絶滅を見ることもなく、棲み分け近代に至っています。

土器の発明
旧石器時代の遺跡からは、たき火をしたとみられる痕跡が各地で見つかっていて、旧石器時代では既に火を使われていたと考えられています。

縄文時代では、その火を利用して『人類が初めて化学変化を利用した』ともいわれる土器が発明されました。言葉交わすようになった、石・骨・木材など自然物を道具としたことに次ぐ、人類史上での大きな転機の一つで、木の実や草の新芽や根っこなどを煮炊きして食べることができるようになり、食べ物の種類を飛躍的に増やした画期的な出来事だったのです。

このころは、氷河が大陸を覆う寒冷な気候から温暖な気候へと変わりつつありました。大気の変化によって暖

外来種を知ろう

かくなり雨が多くなつた大地では、落葉広葉樹の森が生まれ木の実は実らせるようになり、水河期にいた大型の動物にかわってイノシシやシカ・サルなど小型の動物が姿を見せるようになりました。またかつて草原だった土地は浅い海になり、魚や貝などの姿が目立ち始めました。

氷河期が終わって温暖な時代に生きた縄文人は、農業を行いなから狩猟や漁労、採取で食料を確保していたと考えられています。

近年、外来種による被害が深刻化しています。害獣が多様化している現在の、獣種を正確に見極めなければ無駄に費用をかけてしまうことにもなりかねません。相手がハクビシンなのか、もつと大きなイノシシやシカなのか、あるいはサルやクマなのか。それによって防除対策は変わってきます。

意図的導入
外来種の中には、農作物や家畜、ペットの

ように、私たちの生活に欠かせない生き物もたくさんいます。花粉交配用昆虫などは、高齢化が進む日本では、省力化を図る上で欠かせないものとなっています。

また、江戸時代から明治初期の養蜂は、ニホンミツバチが主でしたが、西洋ミツバチと比べ生産量が少なかったため、1788(明治10年)頃から西洋ミツバチによる西洋式の養蜂が広がり、ニホンミツバチでの養蜂は一時廃れましたが、また、近年復活の兆しがあります。

スですが、結局ハブはほとんど食べることなかったといえます。それどころか、在来の生物を捕食し、爆発的に個体数を増やした結果、本来の生態系に甚大な被害を与えています。

また、江門時代から明治初期の養蜂は、ニホンミツバチが主でしたが、西洋ミツバチと比べ生産量が少なかったため、1788(明治10年)頃から西洋ミツバチによる西洋式の養蜂が広がり、ニホンミツバチでの養蜂は一時廃れましたが、また、近年復活の兆しがあります。

セイヨウタンポポはヨーロッパ原産の帰化植物。ニホンタンポポを駆逐して、日本各地に生息域を広げ、現在では最もポピュラーなタンポポとなつていて、在来のニホンタンポポは減少しています。帰化植物が増える则在来種は減少するのです。

また、アミミノクロウサギも減少しているといわれています。

魚類でもオオクチバスやブルーギルなどが全国各地の池に侵入・定着するようになり、在来魚はさまざまな影響を受けています。社会問題となつていいます。

もともと日本にいなかった生き物ですからその形態・生態・習性・食性などが日本の生態系や人間の生活環境にどのような影響を及ぼすのか解らないことが多々あります。

日本でも野に定着しつつある外来種は、わが国固有の動物でも約2,000種といわれていて、我が国の生物多様性が直面する重大な危機の1つとなつていいます。

外来植物
道端に生えている雑草は、かなりの割合で帰化植物で占められています。

国内由来の外来種
外来種といえ、国外由来の種と思われがちですが、しかし、国内の他の場所から移動させられたものも含まれます。同じ日本国内であっても、周囲を海で隔てられた島々などでは、独自の生態系が形成されていて、そこに国内の他の地域から新たな動物植物が持ち込まれば、その地域の固有の生き物に対して、大きな脅威となるからです。これを「国内由来の外来種」と呼んでいます。安易な移動は慎まなければなりません。残された自然環境の保全と、在来種の保護保全は、今後、私達人間に課せられた重要な課題となります。

外貌の特徴
・頭胴長は50〜70センチ
・長は35〜50センチ
・全身は茶色、尾は黒くて長く毛がない。
・独特の大きなオレングジ色の前歯が目立つ。
・物をつかむことのできる小さな手と水かきのついた大きな足。
・足跡では、前足の4本の指が目立つ。
・糞は直径1〜1.5センチ、長さ3〜4センチのウインナーソーセージ様で色は緑色から黒褐色。
・繁殖や休息、避難の場所として土手などに直径20〜30センチ、奥行き1〜6センチの枝分かれしたトンネル状の巣穴を掘る。泳ぎが得意で河川や湖沼の水辺で生活し、水際から10メートル以内で危険が迫ればすぐに水の中に。夜行性だが、昼間にも行動する。水生や陸生の植物の葉や茎、根茎などを好んで食べる草食動物だが、貝や甲殻類も食することがある。水田では畦の破壊によ

マンゲーストは、昼行性の動物であり、ハブは夜行性の動物。もともとこの2種の動物が野外で出会うチャンスは習性的に極めて低かったといえる。ハブの主な原因と考えられる。ハブの駆除を目的に沖繩に導入されたマンゲーストは、

国内由来の外来種
外来種といえ、国外由来の種と思われがちですが、しかし、国内の他の場所から移動させられたものも含まれます。同じ日本国内であっても、周囲を海で隔てられた島々などでは、独自の生態系が形成されていて、そこに国内の他の地域から新たな動物植物が持ち込まれば、その地域の固有の生き物に対して、大きな脅威となるからです。これを「国内由来の外来種」と呼んでいます。安易な移動は慎まなければなりません。残された自然環境の保全と、在来種の保護保全は、今後、私達人間に課せられた重要な課題となります。

外貌の特徴
・頭胴長は50〜70センチ
・長は35〜50センチ
・全身は茶色、尾は黒くて長く毛がない。
・独特の大きなオレングジ色の前歯が目立つ。
・物をつかむことのできる小さな手と水かきのついた大きな足。
・足跡では、前足の4本の指が目立つ。
・糞は直径1〜1.5センチ、長さ3〜4センチのウインナーソーセージ様で色は緑色から黒褐色。
・繁殖や休息、避難の場所として土手などに直径20〜30センチ、奥行き1〜6センチの枝分かれしたトンネル状の巣穴を掘る。泳ぎが得意で河川や湖沼の水辺で生活し、水際から10メートル以内で危険が迫ればすぐに水の中に。夜行性だが、昼間にも行動する。水生や陸生の植物の葉や茎、根茎などを好んで食べる草食動物だが、貝や甲殻類も食することがある。水田では畦の破壊によ

外貌の特徴
・頭胴長は50〜70センチ
・長は35〜50センチ
・全身は茶色、尾は黒くて長く毛がない。
・独特の大きなオレングジ色の前歯が目立つ。
・物をつかむことのできる小さな手と水かきのついた大きな足。
・足跡では、前足の4本の指が目立つ。
・糞は直径1〜1.5センチ、長さ3〜4センチのウインナーソーセージ様で色は緑色から黒褐色。
・繁殖や休息、避難の場所として土手などに直径20〜30センチ、奥行き1〜6センチの枝分かれしたトンネル状の巣穴を掘る。泳ぎが得意で河川や湖沼の水辺で生活し、水際から10メートル以内で危険が迫ればすぐに水の中に。夜行性だが、昼間にも行動する。水生や陸生の植物の葉や茎、根茎などを好んで食べる草食動物だが、貝や甲殻類も食することがある。水田では畦の破壊によ

外貌の特徴
・頭胴長は50〜70センチ
・長は35〜50センチ
・全身は茶色、尾は黒くて長く毛がない。
・独特の大きなオレングジ色の前歯が目立つ。
・物をつかむことのできる小さな手と水かきのついた大きな足。
・足跡では、前足の4本の指が目立つ。
・糞は直径1〜1.5センチ、長さ3〜4センチのウインナーソーセージ様で色は緑色から黒褐色。
・繁殖や休息、避難の場所として土手などに直径20〜30センチ、奥行き1〜6センチの枝分かれしたトンネル状の巣穴を掘る。泳ぎが得意で河川や湖沼の水辺で生活し、水際から10メートル以内で危険が迫ればすぐに水の中に。夜行性だが、昼間にも行動する。水生や陸生の植物の葉や茎、根茎などを好んで食べる草食動物だが、貝や甲殻類も食することがある。水田では畦の破壊によ

外貌の特徴
・頭胴長は50〜70センチ
・長は35〜50センチ
・全身は茶色、尾は黒くて長く毛がない。
・独特の大きなオレングジ色の前歯が目立つ。
・物をつかむことのできる小さな手と水かきのついた大きな足。
・足跡では、前足の4本の指が目立つ。
・糞は直径1〜1.5センチ、長さ3〜4センチのウインナーソーセージ様で色は緑色から黒褐色。
・繁殖や休息、避難の場所として土手などに直径20〜30センチ、奥行き1〜6センチの枝分かれしたトンネル状の巣穴を掘る。泳ぎが得意で河川や湖沼の水辺で生活し、水際から10メートル以内で危険が迫ればすぐに水の中に。夜行性だが、昼間にも行動する。水生や陸生の植物の葉や茎、根茎などを好んで食べる草食動物だが、貝や甲殻類も食することがある。水田では畦の破壊によ

外貌の特徴
・頭胴長は50〜70センチ
・長は35〜50センチ
・全身は茶色、尾は黒くて長く毛がない。
・独特の大きなオレングジ色の前歯が目立つ。
・物をつかむことのできる小さな手と水かきのついた大きな足。
・足跡では、前足の4本の指が目立つ。
・糞は直径1〜1.5センチ、長さ3〜4センチのウインナーソーセージ様で色は緑色から黒褐色。
・繁殖や休息、避難の場所として土手などに直径20〜30センチ、奥行き1〜6センチの枝分かれしたトンネル状の巣穴を掘る。泳ぎが得意で河川や湖沼の水辺で生活し、水際から10メートル以内で危険が迫ればすぐに水の中に。夜行性だが、昼間にも行動する。水生や陸生の植物の葉や茎、根茎などを好んで食べる草食動物だが、貝や甲殻類も食することがある。水田では畦の破壊によ

近年、キツネ、タヌキなど従来の野生種に皮膚病である疥癬症が流行している個体数を減らしています。

疥癬症とは、ヒゼンダニというダニによって皮膚病がおこる病気です。疥癬症に感染した野生種は毛が抜け落ち、皮膚になり、衰弱して死亡します。感染した動物との接触や、感染した動物と行動圏が重なることで、病気が伝播してゆきます。

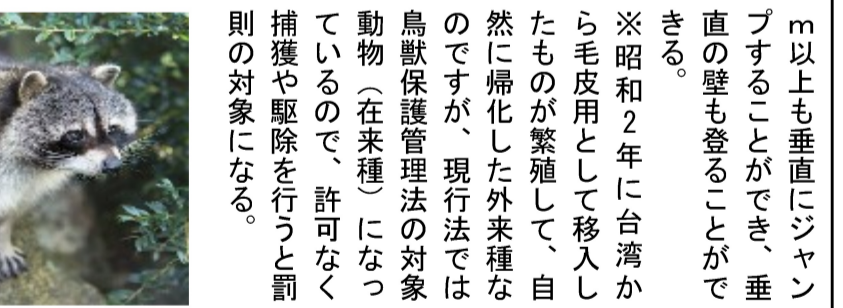
写真II疥癬に罹患した
①タヌキ
②アナグマ
③キツネ



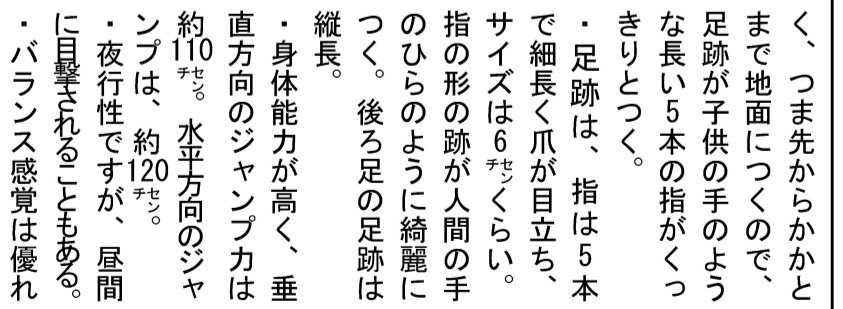
ヌートリア



ハクビシン



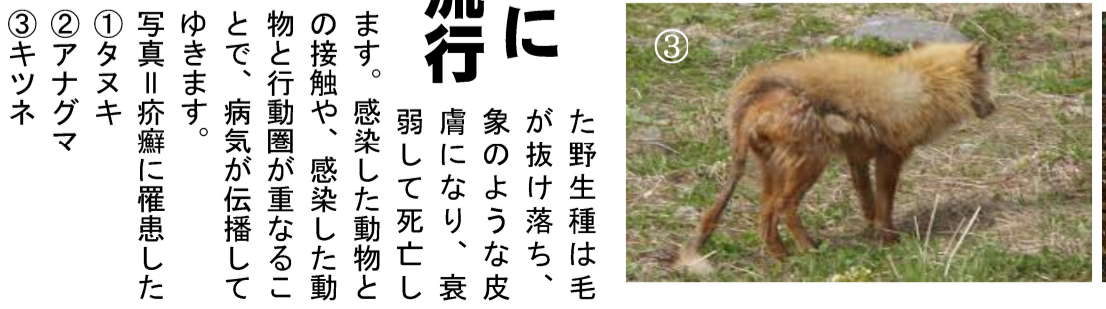
アライグマ



③



②



①